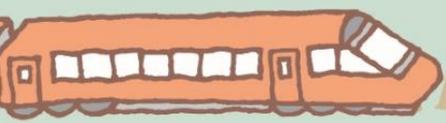


豊かなみどりに包まれ、人と自然が調和した

ウェルネスな日常の創造

～小田急線4駅周辺のにぎわい創造に向けて～

渋沢丘陵 利活用方針



令和4年(2022年)3月

神奈川県 秦野市



目次

第1章	はじめに	1
1	渋沢丘陵利活用方針とは	1
2	対象エリア	4
3	渋沢丘陵利活用方針の位置付けと期間	5
第2章	渋沢丘陵を取り巻く環境	6
1	社会環境の変化	6
2	主な地域資源	10
3	各種調査の実施目的	15
4	秦野市Webアンケート調査	16
5	様々な分野の事業者等に対するヒアリング調査	17
第3章	渋沢丘陵利活用方針	19
1	渋沢丘陵のポテンシャル	19
2	渋沢丘陵利活用方針のコンセプト	21
3	渋沢丘陵利活用方針	22
4	PDCAサイクルによる推進プロセス	25

第1章 はじめに

1 渋沢丘陵利活用方針とは

豊かな自然をはじめとした様々な魅力

渋沢丘陵は、大磯丘陵の北端の一部で本市南側に位置する丘陵です。小田急小田原線秦野駅や渋沢駅周辺をはじめとした市街地から近い距離にありながら、「八重桜の里」として有名な頭高山（ずっこうやま）や関東大地震で誕生し、国登録記念物である震生湖といった豊かな自然に恵まれています。

また、良好な自然環境の里地里山や農地、利便性と快適性を兼ね備えた市街地、表丹沢・富士山・相模湾などが一望できる眺望、環境省「名水百選」にも選定された湧水群など様々な魅力を有しています。



頭高山山頂からの眺望



震生湖

地形的特徴が生んだ湧水群と東海道の脇往還でにぎわった「矢倉沢往還」

このように様々な魅力を有する渋沢丘陵とその周辺が発展してきた背景には、県内唯一である盆地独特の地質が生んだ湧水と東海道の脇往還であった古道「矢倉沢往還」の存在があります。

丹沢山地の南麓に広がる秦野盆地は、約4万年前に始まった渋沢断層の活動による南側の大磯丘陵の隆起と北側の秦野盆地の陥没によって形成されました。同じ頃、箱根火山から噴出した軽石流^{※1}は足柄平野、大磯丘陵を東に流れて現在の横浜にまで達しました。この軽石流の堆積時とそれに続く大磯丘陵の隆起の時代には丹沢山地から古水無川や古四十八瀬川が運んだ砂礫^{※2}が厚く堆積しました。この砂礫層には古富士火山の火山灰が混入しており、現在でも良好な帯水層、いわゆる天然の「水がめ」となっています。



若竹の泉



峠湧水

※1 軽石流（かるいしりゅう）：火砕流の一種で主として軽石塊とガラス質火山灰からなるもの。

※2 砂礫（されき）：砂と小石のこと。地質学では粒径が2～16分の1ミリメートルのものを砂、2ミリメートル以上のものを礫と呼ぶ。

やがて秦野盆地の地下水湧出地域を中心に集落が形成されていきました。渋沢丘陵周辺では、室川の周辺や後に東海道の脇往還としてにぎわう古道「矢倉沢往還」沿いに集落が形成されていきました。

矢倉沢往還は、江戸時代に整備が進み、物資運搬に際しては急峻な箱根峠に対して足柄峠は緩やかであり、江戸ー沼津間の短絡路でもあったため、東海道の脇往還としても機能し、天正18年(1590年)には、箱根の関所と同等の矢倉沢関所が設置され、駿河国への通行人を検閲していました。

江戸時代中期以降になると、「講」と称する民衆の集団参詣が盛んになり、富士山や大山などへの参詣者が急増したため、宿駅などが整備されていた矢倉沢往還が江戸からの参詣道として盛んに利用されました。現在も渋沢丘陵にある沿道には当時の道標や石仏、石碑などが数多く点在し、往時の面影を伝えています。



矢倉沢往還 (千村地区)



矢倉沢往還のニツ塚

小田急線の開通と秦野中井インターチェンジの開設などによるまちの発展

明治に入り、近代国家の成立とともに、様々な制度改革がなされる中、明治22年(1889年)には市・町村制が施行され、秦野町並びに南・東・北・西・上秦野村及び大根村の一町六村が誕生しました。また、明治39年(1906年)の東海道線二宮駅から秦野町までの湘南馬車鉄道(後の湘南軽便鉄道・湘南軌道)の開通、さらに小田原急行鉄道株式会社(現・小田急電鉄株式会社)による昭和2年(1927年)の新宿ー小田原間を結ぶ小田原線の開通と鶴巻駅(現・鶴巻温泉駅)、大根駅(現・東海大学前駅)、大秦野駅(現・秦野駅)、渋沢駅の開設など、近代化への歩みが着実に進められてきました。昭和30年(1955年)に秦野町、南秦野町、東秦野村及び北秦野村の二町二村が合併して秦野市が誕生し、その後、大根村(真田を除く。)が加わりました。昭和31年(1956年)には、かつての矢倉沢往還を原型とする国道246号東京沼津線が二級国道(昭和40年に一般国道)に指定されました。そして、昭和38年(1963年)には、西秦野町も加わり、現在の秦野市となりました。

その後、国の高度経済成長政策とあいまって、急激な都市化がみられ、昭和56年(1981年)の東名高速道路秦野中井インターチェンジの開設に伴い、南が丘地区の開発や西大竹尾尻地区への研究開発型企業の誘致など、都心からのアクセスの良さを生かして、住宅立地や産業立地が進み、発展してきました。



東名高速道路
秦野中井インターチェンジ完成

国道246号バイパスの事業決定と新たな期待

平成に入ると、新東名高速道路と国道246号バイパスの計画決定に加え、立野台地区の開発など、本市及び渋沢丘陵を取り巻く社会環境も大きく変化しました。

平成26年（2014年）には、渋沢丘陵を横断する国道246号バイパス（厚木秦野道路）の本市に関連する区間のうち、伊勢原市境から秦野中井インターチェンジまでの事業化が決定されました。この国道246号バイパスが全線開通すると、東名高速道路と新東名高速道路がつながり、高速道路ネットワークと一体となって、災害時の重要路線になるとともに、地域振興や産業振興の面からも、本市の更なる発展の基盤となることが期待されています。

令和という新たな時代を迎えた現在、少子・超高齢社会の進行や人口減少社会の到来、地域経済の縮小、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う「新たな日常」への対応など、大きな社会変化に直面しています。



立野台



秦野中井インターチェンジ

持続可能な地域活性化に向けて

こうした背景を分析するとともに、将来の社会潮流などを予測した上で、本市が進める小田急線4駅「鶴巻温泉」「東海大学前」「秦野」「渋沢」周辺にぎわい創造の取組みの一つとして、渋沢丘陵とその周辺にある様々な地域資源や取組みを効果的に活用・連携させ、秦野駅・渋沢駅周辺エリアや秦野中井インターチェンジを結びつけるとともに、将来的に開通が予定される国道246号バイパス渋沢インターチェンジ（仮称）も見据えながら、渋沢丘陵の利活用に関する方針を策定することで、地域の活性化につなげ、本市の持続可能なまちづくりを実現していきます。



富士山と秦野盆地

2 対象エリア

本方針では、大磯丘陵の北端にあたる本市の南側に位置する標高200m程度のなだらかな丘陵とその周辺を「渋沢丘陵」とします。

渋沢丘陵は、様々な野鳥や昆虫、植物を観察することができるとともに、秦野市街地や富士山・丹沢の山並み、相模湾などを一望できる市内でも屈指の眺望スポットが点在しており、子どもから高齢者まで幅広い世代に気軽なハイキングやサイクリングのコースとして人気があります。

このエリアには、昔から変わらない緑豊かな自然が広がり、秦野駅や渋沢駅、秦野中井インターチェンジにもほど近いながら、閑静な住宅街やはだの桜みち（県道62号）沿いを中心としたにぎわいある飲食店などの商業施設、数多くの水が汲める湧水スポット、

「出雲大社相模分祠」や「白笹稻荷神社」など歴史ある神社仏閣が点在するなど、様々な魅力を有しています。

秦野駅や渋沢駅、秦野中井インターチェンジに加え、新東名高速道路に設置される秦野丹沢スマートインターチェンジ及び新秦野インターチェンジにより、首都圏や中部・関西方面からのアクセス性がさらに向上し、産業振興や観光振興などの地域活性化が大いに期待されます。

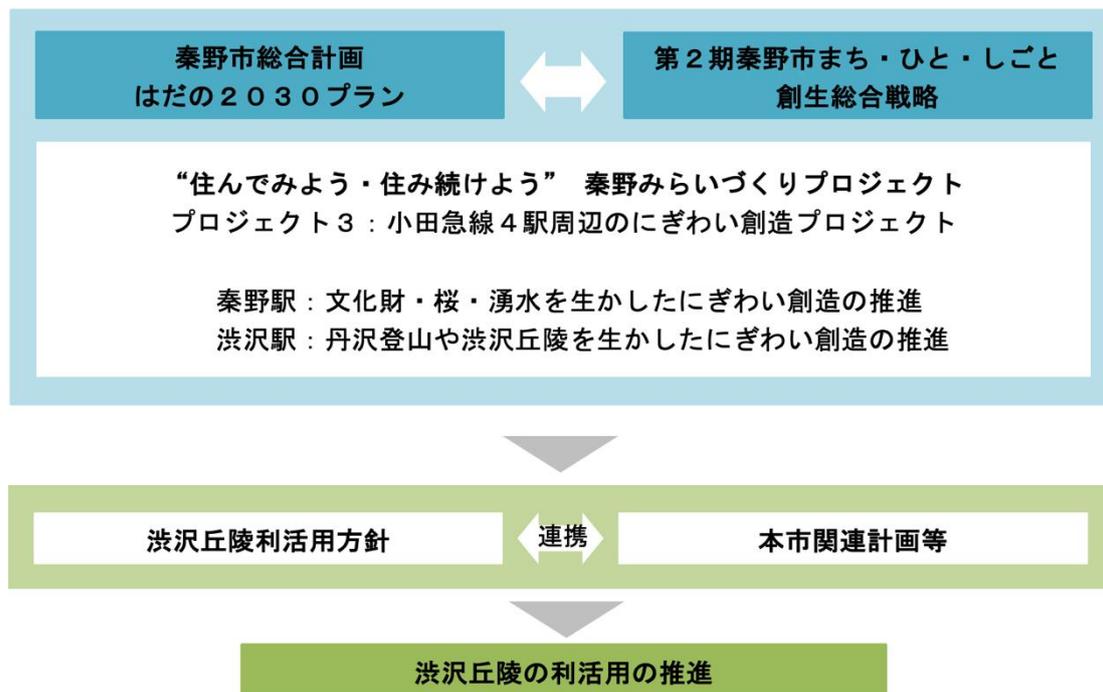


3 渋沢丘陵利活用方針の位置付けと期間

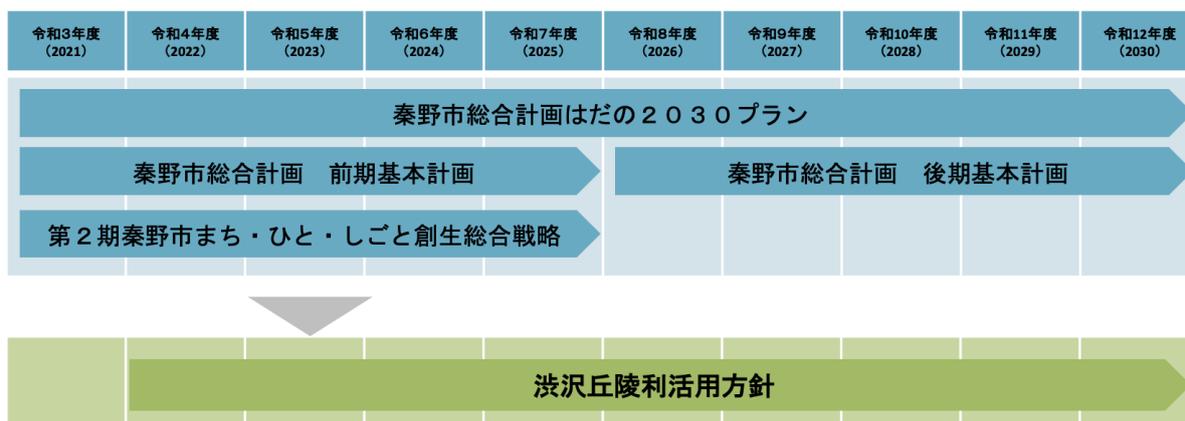
本方針は、「秦野市総合計画はだの2030プラン」「第2期秦野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を上位計画とするとともに、他の関連計画などとも連携して、整合性を図りながら、SDGs（持続可能な開発目標）※3の理念にも対応します。

また、本方針期間については、令和12年度（2030年度）までの9年間とし、「秦野市総合計画はだの2030プラン」と連携を図りながら取り組んでいきます。

■ 渋沢丘陵利活用方針の位置付け



■ 渋沢丘陵利活用方針の期間



※3 SDGs（エス・ディー・ジーズ）：「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称。2015年9月の国連サミットで採択されたもので、2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた国際目標。

第2章 渋沢丘陵を取り巻く環境

1 社会環境の変化

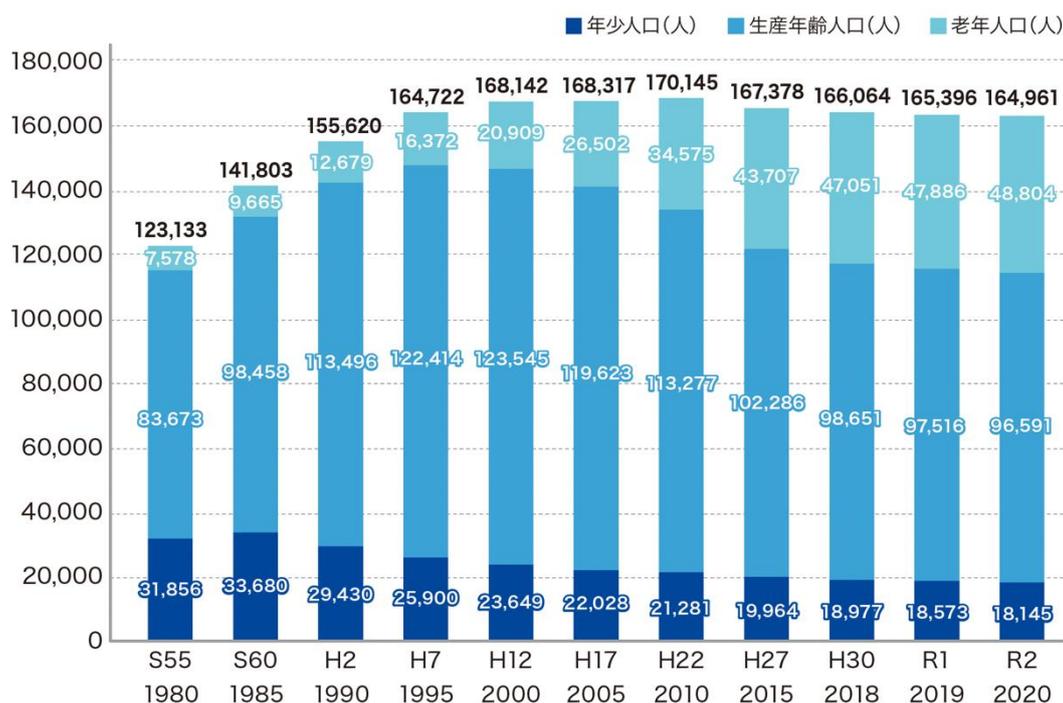
(1) 関連する社会潮流

ア 少子・超高齢社会の進行と人口減少社会の到来

現在、わが国では出生数が減少傾向にあり、団塊世代が75歳の後期高齢者に達するなど、少子・高齢化と人口減少がさらに進行していくことが予想されます。

本市においても、年齢3区分別の人口の推移を見ると、老年人口（65歳以上の人口）は年々増加していますが、昭和60年（1985年）以降、年少人口（15歳未満の人口）は年々減少しています。

参考：年齢3区分別人口の推移



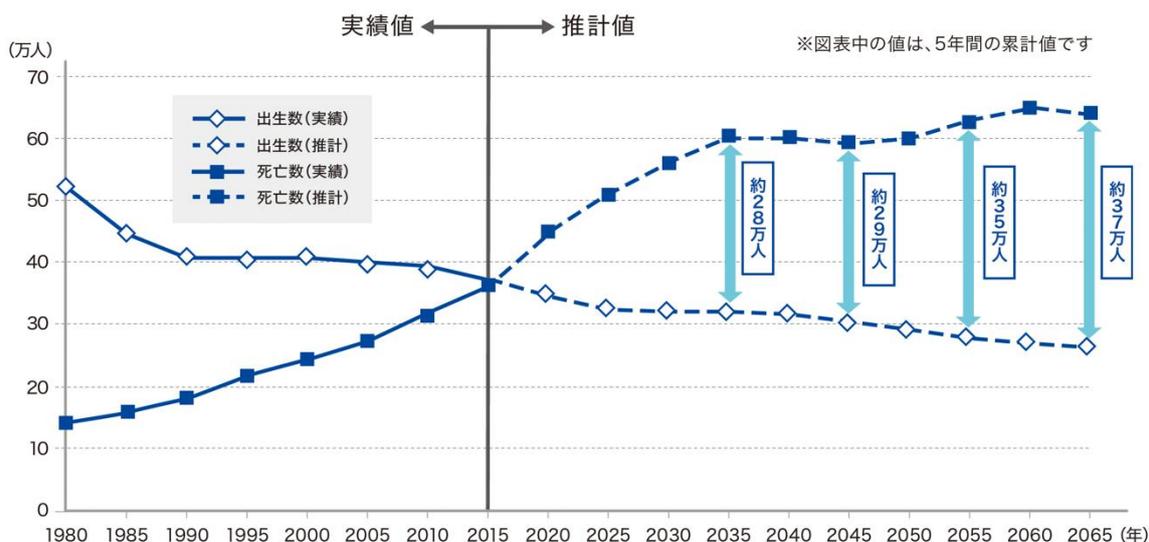
出典：秦野市「秦野市人口ビジョン」平成28年3月/令和3年3月改定より作成

また、神奈川県全体の人口も死亡数が出生数を上回った自然減の状態が続いています。自然増減^{※4}と社会増減^{※5}の将来推計では、令和12年（2030年）には死亡者数が年間10万人を超えると見込まれ、出生者数を差し引いても、年間5万人程度の自然減が生じる見込みです。

※4 自然増減：出生数と死亡数による人口増減のこと。

※5 社会増減：転入数と転出数による人口増減のこと。

参考：出生数と死亡数の将来推計



出典：神奈川県「神奈川県人口ビジョン」平成28年3月/令和2年3月改訂より作成

イ モノ消費時代からコト消費時代への価値観の転換

消費の成熟化やインターネットの普及などライフスタイルの多様化などにより、社会環境も大きな影響を受けています。特に消費行動については、モノやサービスを購入する「モノ消費」から、モノやサービスを使ってどのような経験・体験をするかという「コト消費」への変化が進行しています。

ウ スローライフ志向の増加と地方移住の動きの加速

「モノ消費」から「コト消費」への変化に象徴されるような生活環境や人々の意識の変化から、自然に触れながら過ごす時間やのびのび子育てができる環境など、生活の質や人生の楽しみを重視するスローライフ志向が広がっています。それに伴い、スローライフの実現や自然・地域の人々とのつながりを求め、自然豊かな地方へ移住する動きも拡大しています。

エ 平均寿命から健康寿命へと高まる健康意識

スローライフ志向が広がる背景として、健康とは、ただ病気ではないということではなく、食や運動、休養に留意した生活を送ることにより、生活習慣病のリスクや精神的なストレスを減らすことによって、肉体的にも精神的にも健康を維持しながら長生きしようという、平均寿命から健康寿命^{※6}を重視する意識の変化があります。

※6 健康寿命：2000年に世界保健機関（WHO）が提唱した新しい指標で、平均寿命から寝たきりや認知症など介護状態の期間を差し引いた、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間。

(2) 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識や行動の変化

令和2年(2020年)から世界に広がった新型コロナウイルス感染症は100年に一度の感染症パンデミックとなり、私たちの日常生活を取り巻く環境も大きな転換期を迎え、新たな価値観へのシフトやライフスタイルの変化が起きています。

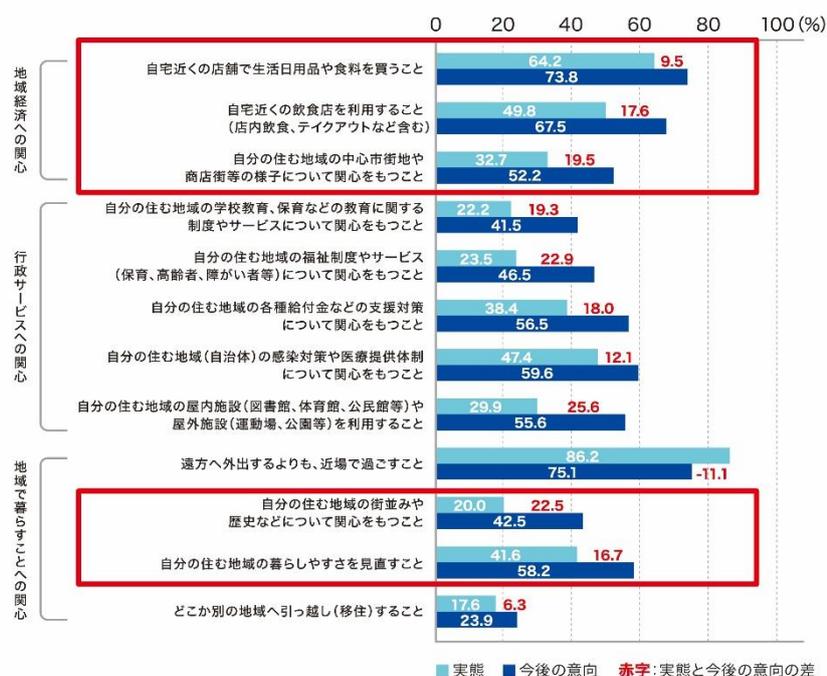
内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」(令和2年6月21日)によると、今回の感染症拡大前と比べて「家族の重要性」や「仕事以外の重要性」「社会とのつながりの重要性」をより意識するようになったと回答する人の割合が高くなり、仕事より「生活を重視するように変化」した人が半数に及んでいます。

家族と過ごす時間が増えたという人は約7割にも及び、その増えた家族と過ごす時間を今後も保ちたいという人は、そのうちの約8割を占めています。

さらに、第一生命経済研究所「第11回 ライフデザインに関する調査」(令和3年1月29日～2月3日)では、感染症拡大下における生活や意識の現状(実態)と今後の意向との比較から次のような傾向があります。

「自宅近くの店舗で生活日用品や食料を買うこと」「自宅近くの飲食店を利用すること」「自分の住む地域の中心市街地や商店街などの様子について関心を持つこと」また「自分の住む地域の街並みや歴史などについて関心をもつこと」「自分の住む地域の暮らしやすさを見直すこと」に対する意向は上昇傾向にあることから、地域に対する誇り(シビックプライド)の高まりにつながる傾向が見られます。

参考:新型コロナウイルス感染症拡大後の生活変化(実態)と今後の意向

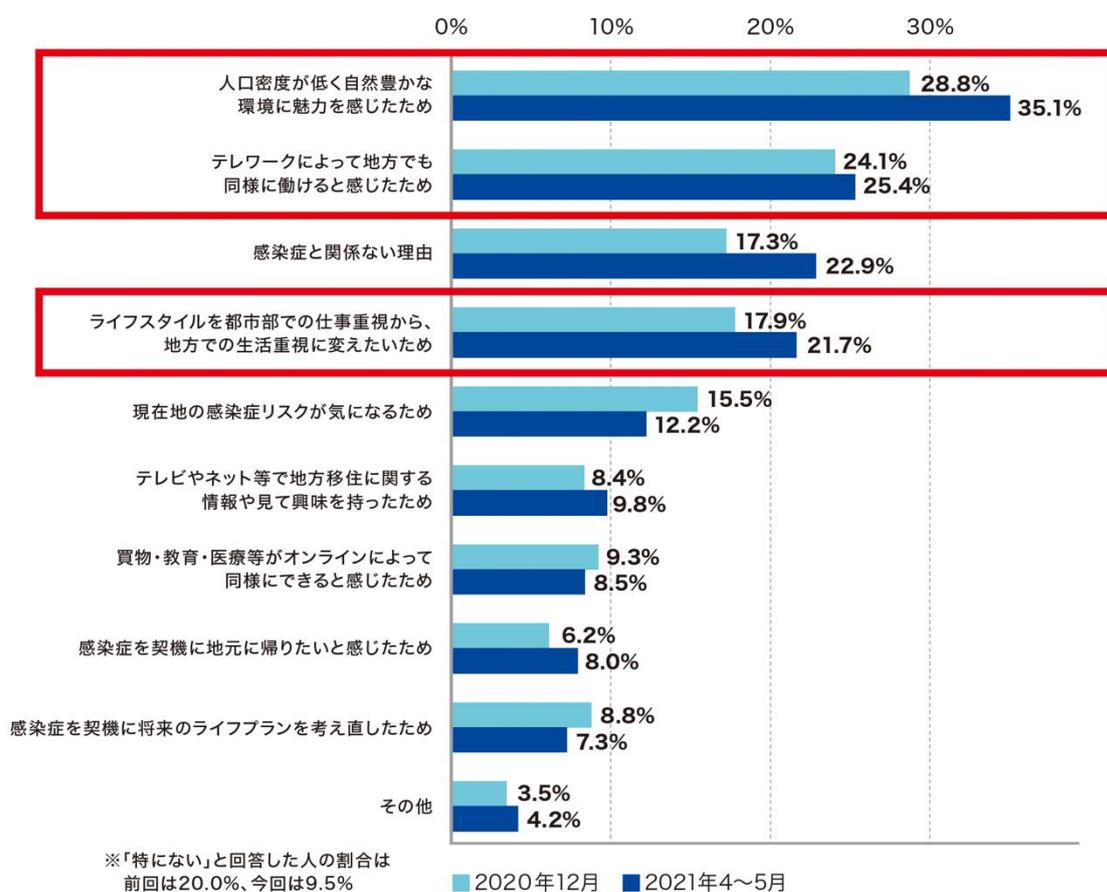


出典: 第一生命経済研究所「第11回 ライフデザインに関する調査」令和3年1月29日～2月3日より作成

一方、内閣府「第3回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」（令和3年6月4日）によると、東京圏在住の人が地方移住に関心を持つ理由として、「人口密度が低く自然豊かな環境に魅力を感じた」「ライフスタイルを都市部での仕事重視から、地方での生活重視に変えたい」などが多く挙げられており、「仕事よりも生活を重視するように変化」したなどの意識変化が背景にあると考えられます。

ただし、新型コロナウイルス感染症の拡大で、テレワークの普及が進んだことも要因の一つと考えられます。

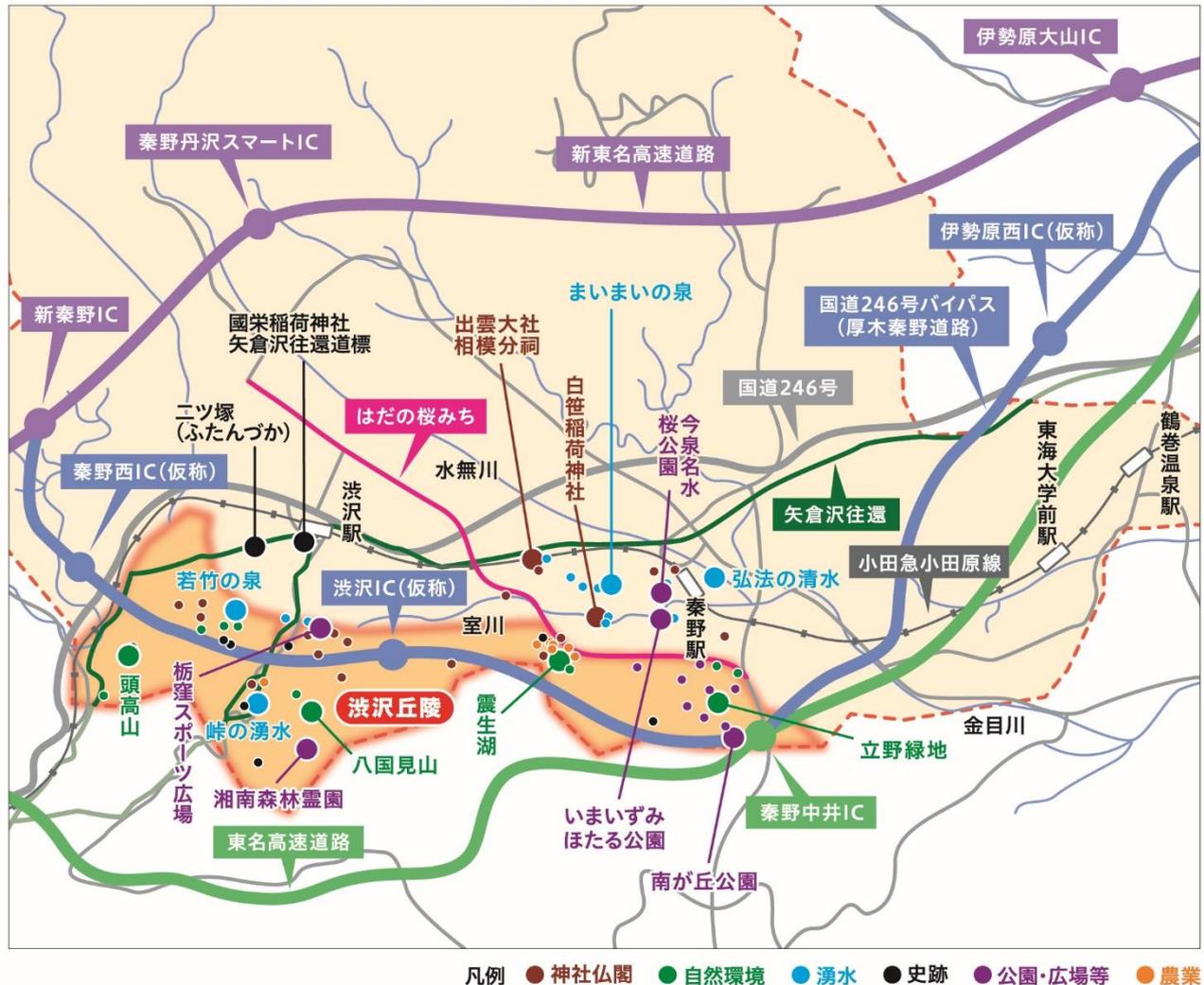
参考：地方移住への関心理由（東京圏在住で地方移住に関心がある人）



出典：内閣府「第3回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」令和3年6月4日より作成

2 主な地域資源

「八重桜の里」として有名な頭高山や国登録記念物である震生湖などの豊かな自然環境、秦野駅近くにある弘法大師の伝説が残る弘法の清水をはじめとする「名水百選」に選ばれた秦野盆地湧水群、出雲大社相模分祠や白笹稲荷神社などの神社仏閣をはじめ、渋沢丘陵に点在する様々な分野の地域資源をマップに示します。



(1) 自然環境

市街地と雄大な丹沢の山々を一望できる標高約300mの頭高山は、渋沢駅から矢倉沢往還の古道の雰囲気を楽しみながら徒歩1時間程度で登れ、春には食用として全国でも有数の生産量を誇る千村の八重桜も見るすることができます。

また、大正12年（1923年）9月1日の関東大地震で付近が崩落することで、市木沢（いちきさわ）がせき止められて誕生した国登録記念物の震生湖は、コゲラやヤマガラ、カワセミなど多くの野鳥を見ることができるほか、フナやブラックバスなどの魚が釣れるスポットとしても有名です。



頭高山



震生湖

さらに、約6.2kmにわたる県内最長を誇るソメイヨシノの桜並木「はだの桜みち」をはじめ、様々な桜の表情を楽しめる花見の名所が点在し、毎年春には市内外から多くの方が訪れています。



はだの桜みち



千村の八重桜

加えて、渋沢丘陵は人と自然との距離が近い里山であり、南が丘地区や立野台地区などでは開発が進んでいるものの、かながわの探鳥地50選である立野緑地をはじめ野生生物が生息できる貴重な自然環境は十分に残されており、キビタキやホトトギス、ウグイスなど様々な野鳥を見ることができます。



立野緑地

近年、小中学生を中心に昆虫に対する関心が高まっていますが、渋沢丘陵ではクワガタムシやカブトムシ、バッタなど人気のある昆虫のほか、国蝶オオムラサキや清流にすむゲンジボタルも見ることができます。



キビタキ



オオムラサキ

そして、秦野駅や渋沢駅を起点にして、頭高山と震生湖をつなぐように、なだらかなハイキングコースがあり、沿道では里山の日常的な風景や四季折々に咲き誇る花々、木もれ日あふれる森林、丹沢をはじめ、富士山や相模湾、伊豆半島を望む絶景などを、四季を問わず長閑（のどか）に楽しむことができます。

(2) 湧水

本市は県内唯一の盆地であり、地下水を貯めておく「天然の水がめ」という地形的特性から秦野盆地に豊富に蓄えられた芦ノ湖の約4倍の地下水が様々な場所で湧き出しており、環境省の「名水百選」にも選出されています。湧水が集まってできたといわれる千村に源を発する室川のほか、秦野駅や頭高山の周辺には多くの湧水スポットがあり、縄文時代より生活用水として活用されていたといわれています。これらの湧水は現代においても市民生活を支えるインフラとしてはもちろん、今泉名水桜公園をはじめとした湧水スポットを巡るハイキングツアーなど、観光資源としても利用されています。



まいまいの泉



弘法の清水

(3) 神社仏閣

全国でも数少ない出雲大社分祠で「関東の出雲さん」として知られる出雲大社相模分祠や関東三大稻荷の一つで江戸時代初期に創建された白笹稻荷神社をはじめ、日本五弁財天の総本山である奈良の天河弁財天の分霊をいただく福寿弁財天、春には桜やチューリップ、牡丹（ボタン）などの可憐な花々を楽しめる戦国時代に建立された泉蔵寺など、多くの参拝者が訪れる神社仏閣が数多く点在しています。また、境内に秦野名水の風情ある湧水スポットを有し、市内外から多くの方が訪れる憩いの場となっている神社もあります。



出雲大社 相模分祠



白笹稻荷神社

(4) 史跡

頭高山の麓には、かつて東海道の脇往還であった古道「矢倉沢往還」があり、富士山や大山への参詣により、多くの旅人でにぎわっていました。当時、千村地区の街道沿いには茶屋があったといわれ、今もその名残が「茶屋庭」という屋号に残されているとともに、当時の道標や石仏、石碑などが数多く点在し、昔の面影を伝えています。



矢倉沢往還の
沓掛（くつかけ）不動尊

(5) 公園

古（いにしえ）より「太岳院池」と呼ばれ、秦野盆地湧水群の中でも最大級の湧水量を誇る今泉湧水池を中心とした**今泉名水桜公園**では、年間を通して桜を楽しめるように開花時期の異なる18種類もの桜が植えられ、地域住民に親しまれています。



今泉名水桜公園

また、向原湧水の流れる水と緑に包まれた**いまいずみほたる公園**は、秦野駅からほど近い距離にもかかわらず、毎年5月下旬から6月中旬にかけてたくさんのホタルが舞い、幻想的な光景が訪れた方を楽しませてくれます。



いまいずみほたる公園



南が丘公園

さらに、**栃窪スポーツ広場**や**立野緑地スポーツ広場**、**南が丘公園**をはじめ、野球やサッカー、ソフトボールなどのスポーツが楽しめる公園も充実しています。

(6) 観光農園や市民農園

江戸時代初期に始まったといわれる葉タバコ耕作は、戦後の高度成長や産業構造の転換などに伴って徐々に衰退し、昭和59年（1984年）に300余年の長い歴史を閉じましたが、輪作として明治時代から落花生やそばを中心に年間を通じて多種多様な農作物や花きが栽培されるようになりました。

また、豊かな自然の中で、ブルーベリーや落花生、さつまいもなど、季節によって様々な収穫体験を行っています。



ブルーベリーの収穫体験



落花生の収穫体験

さらに、渋沢丘陵には**市民農園**や手ぶらで農作業ができる**体験型農園**といった施設もあります。

(7) 民間事業者等の取組み

出雲大社相模分祠の境内西側には、平成19年（2007年）に約1700人の手によって植樹された「千年の杜」があります。杜の中の湧水にはメダカやドジョウ・ホタルなどが生息しており、多くの参拝者がお水取りに訪れる憩いの場になっています。



出雲大社相模分祠の「千年の杜」

また、南はだの村七福神と鶴亀めぐりという、かつての南秦野村を通り、七福神に鶴亀を加えた9つの寺社を名水と歴史に触れながら、ゆったりと巡る御朱印集めも人気があり、市内外の多くの方に親しまれています。



南はだの村七福神と鶴亀めぐり

さらに、湘南からの風と恵まれた日照時間を生かし、ヨーロッパでは古より「生命の樹」といわれるほど、生命力が強い植物として知られる「オリーブ」の栽培を始めている事業者もいます。



秦野オリーブ園

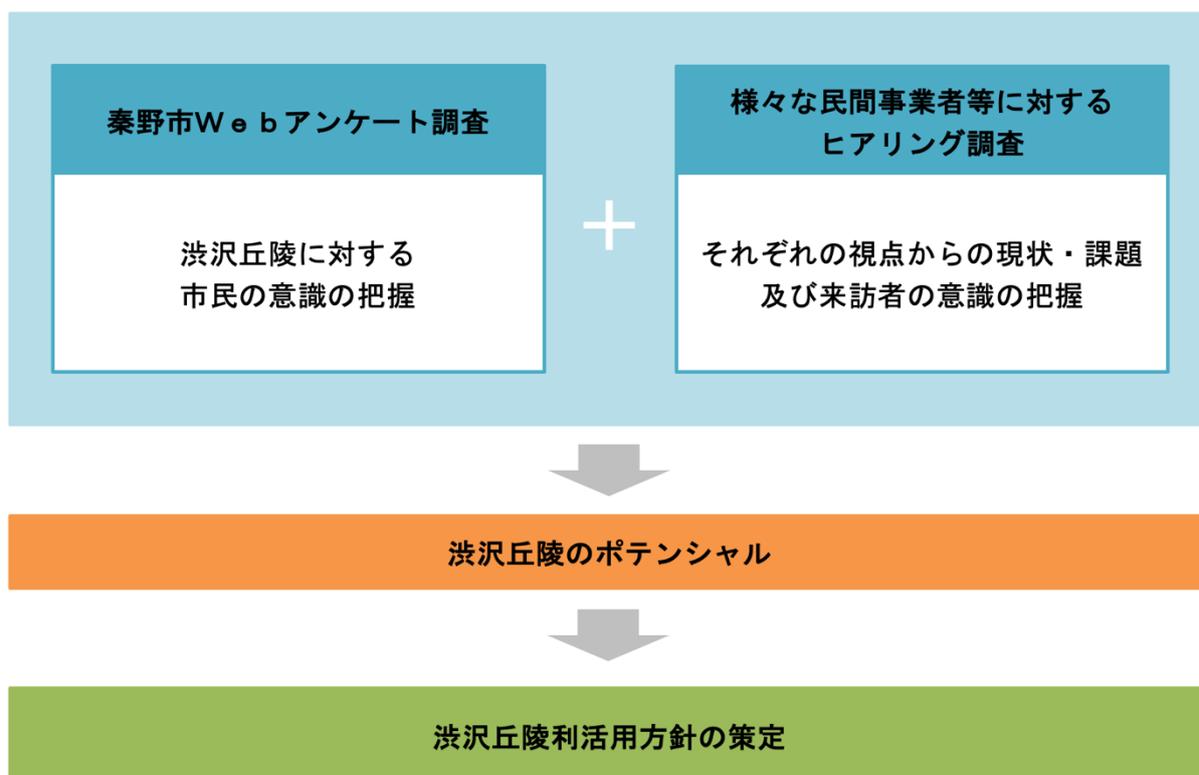
3 各種調査の実施目的

渋沢丘陵利活用方針の策定に向けて、「渋沢丘陵に対してどのような意識を持っているのか」「渋沢丘陵にはどのような方が訪れているのか」「利活用に対してどのような課題があるのか」など様々な観点から把握するために、各種調査を実施しました。

まず、市民の渋沢丘陵に対する意識を把握するために、令和3年6月に実施した秦野市Webアンケート調査結果を分析しました。

さらに、渋沢丘陵とその周辺の交通や農業、飲食、観光事業者に加え、里山団体などの地域ボランティア団体、市外からの来訪者にもヒアリングを実施し、それぞれの視点で現状の把握や課題を整理した上で、渋沢丘陵のポテンシャルを探ります。

■各種調査の位置付け



4 秦野市Webアンケート調査

(1) アンケート調査の概要

本市が行政サービスの向上と市民の行政に対する意識向上のための基礎資料とすることを目的に実施した、Webアンケート調査から渋沢丘陵に関する項目を抜粋しています。

■調査の実施方法

① 調査地域	市内全域
② 調査対象	秦野市のインターネット調査会社登録者
③ 対象者数	400人（回収ベース）
④ 母集団	秦野市のインターネット調査会社登録者約4,600人
⑤ 調査方法	インターネット調査
⑥ 調査期間	令和3年6月23日～6月29日
⑦ 調査機関	株式会社総合企画

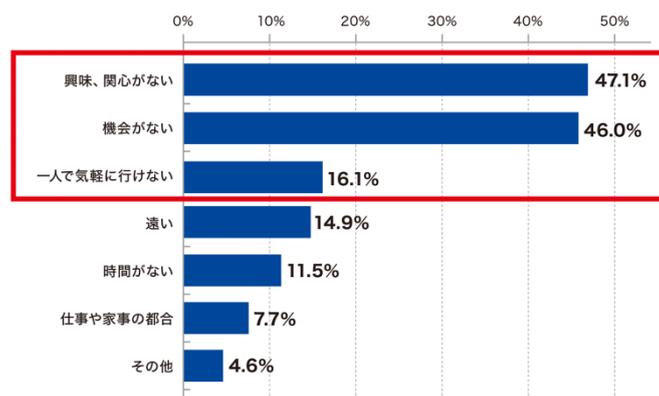
(2) 市民の渋沢丘陵に対する意識

「自然豊かな環境を有するエリア」（47.8%）が最も高く、次いで「住宅地から身近にある緑豊かな環境を有するエリア」（34.0%）、「表丹沢の山並みや富士山、相模湾などを一望できるエリア」（30.8%）と続いています。また、「特に印象がない」が26.8%となっており、渋沢丘陵ならではの特別な魅力はあまり認識されていないようです。

年1回以上訪れる人を合計すると、約35%となっています。一方で、「過去に訪れたことがあるが、現在は訪れない」は31.8%、「訪れたことがない」は33.5%でした。年代別に見ると、「訪れたことがない」は60代以上では1割台半ばと低くなっていますが、30代で5割を超えるなど、若年層の関心が得られていません。

訪れない／訪れたことがない理由は「興味、関心がない」（47.1%）が最も多く、次いで「機会がない」（46.0%）、「一人で気軽に行けない」（16.1%）と続いています。

参考：訪れない／訪れたことがない理由



5 様々な分野の事業者等に対するヒアリング調査

渋沢丘陵とその周辺の交通や農業、飲食、観光事業者に加え、里山団体などの地域ボランティア団体や市外からの来訪者に対して、それぞれの視点から見た渋沢丘陵についてヒアリングを実施することで、渋沢丘陵の現状を把握し、課題の抽出に役立てます。

(1) 身近にある里山の自然環境について

渋沢丘陵は、秦野駅・渋沢駅や住宅地から徒歩で行ける近い距離ながら、豊かな里山の自然環境があるとともに、眺望の良いスポットが点在しているため、気軽にウォーキングやハイキングで訪れる地域住民が多くいます。

また、震生湖は県外からも釣り客が集まる有名なスポットであるほか、周辺にはカブトムシなど人気のある昆虫が豊富に生息しています。

しかし、ハイキングコースや眺望の良いスポットでは、木が鬱蒼（うっそう）としている箇所もあり、剪定・伐採などの人の手による管理が必要になっています。

さらに、頭高山周辺にも増えつつあるヤマビルへの対策も必要です。農業者の高齢化や後継者不足により耕作放棄地が増加すると、シカやイノシシなどの野生動物と人との距離が縮まり、更なる農作物被害やヤマビルの生息範囲が拡大する懸念もあります。

(2) ハイキングコース周辺の施設や設備、道路などについて

渋沢丘陵は、駅や住宅地から気軽に徒歩で訪れることができますが、住宅地にも近いいため、地域住民に配慮したコース設定が重要になります。

また、ハイキングコース沿いに道標やトイレ、休憩場所、駐車場などが十分ではありません。

さらに、ゆっくり休憩できるカフェや地元の特産品が購入できる直売所のほか、活用しきれていない施設や遊休地の新たな視点からの活用も求められています。

(3) 渋沢丘陵の農産物・名産品について

渋沢丘陵では大根やネギ、ソラマメ、落花生などの野菜のほか、栗やみかん、梅などの果樹、カーネーションやシクラメン、バラ、小菊などの花きをはじめ、千村の八重桜など多種多様な農作物が栽培されています。本市は、「名水百選」にも選定された湧水群を有しているなど豊かな水とみどりに囲まれており、その環境で育った農作物を生産者と消費者が近い都市型農業の特徴を生かし、新鮮で安全な農産物を「はだのじばさんず」やスーパーなどの量販店、小・中学校給食へ提供することで、地産地消が推進されます。

また、県のかながわブランド認証品である峠漬^{※7}を若手加工グループに伝承する活動のほか、豊富な栄養素を含み、鳥獣被害もほとんどないことから、新たな特産品を目指して市内で取り組んでいる青パパイヤも栽培されています。

そして、ブランド力の向上のため、緑豊かな自然と伝統を生かした秦野らしさがある新たな名産品の創出も求められています。

(4) 渋沢丘陵で実施されている体験・イベントについて

年間を通した収穫体験をはじめ、秦野市観光ボランティアの会主催のハイキング、小田急電鉄との連携によるウォーキングイベント、福を集める南はだの村七福神と鶴亀めぐりの御朱印集めなど、多様なイベントが実施されています。

また、自然体験イベントやフォトセミナーなどは、有料でも東京や横浜などの首都圏から来訪する方がいます。

一方、渋沢丘陵に来ないと体験できない独自のコンテンツが少ないため、国内でも普及し始めているE-bikeや電動キックボードなど新たな移動手段による周遊促進策のほか、豊かな自然環境の中でのキャンプなどが求められています。

(5) 情報発信について

市外からの来訪者の多くは、FacebookやInstagramをはじめとしたSNSを見て来訪するのに対し、市民は広報誌やタウンニュース、チラシなどの閲覧が多く、シニア世代はテレビ放送後に来店や問合せが増えるという傾向があります。

また、秦野駅観光案内所では、ハイキングや登山、湧水に関する問合せが多く、ハイキングやイベント、飲食店などの情報がまとまった案内冊子が求められています。

このように、ターゲットやニーズに応じた、適切で効果的なメディアを活用した戦略的な情報発信が十分ではありません。

(6) 地域の事業者間の連携について

個々に優れた情報や技術を有している事業者が多いのですが、個別のつながりに限定されているため、様々な業種の事業者が集い、情報交換ができる場が求められています。

また、行政と連携を密にして、地域の課題解決に取り組むような地域貢献に高い意欲を持つ事業者もいます。

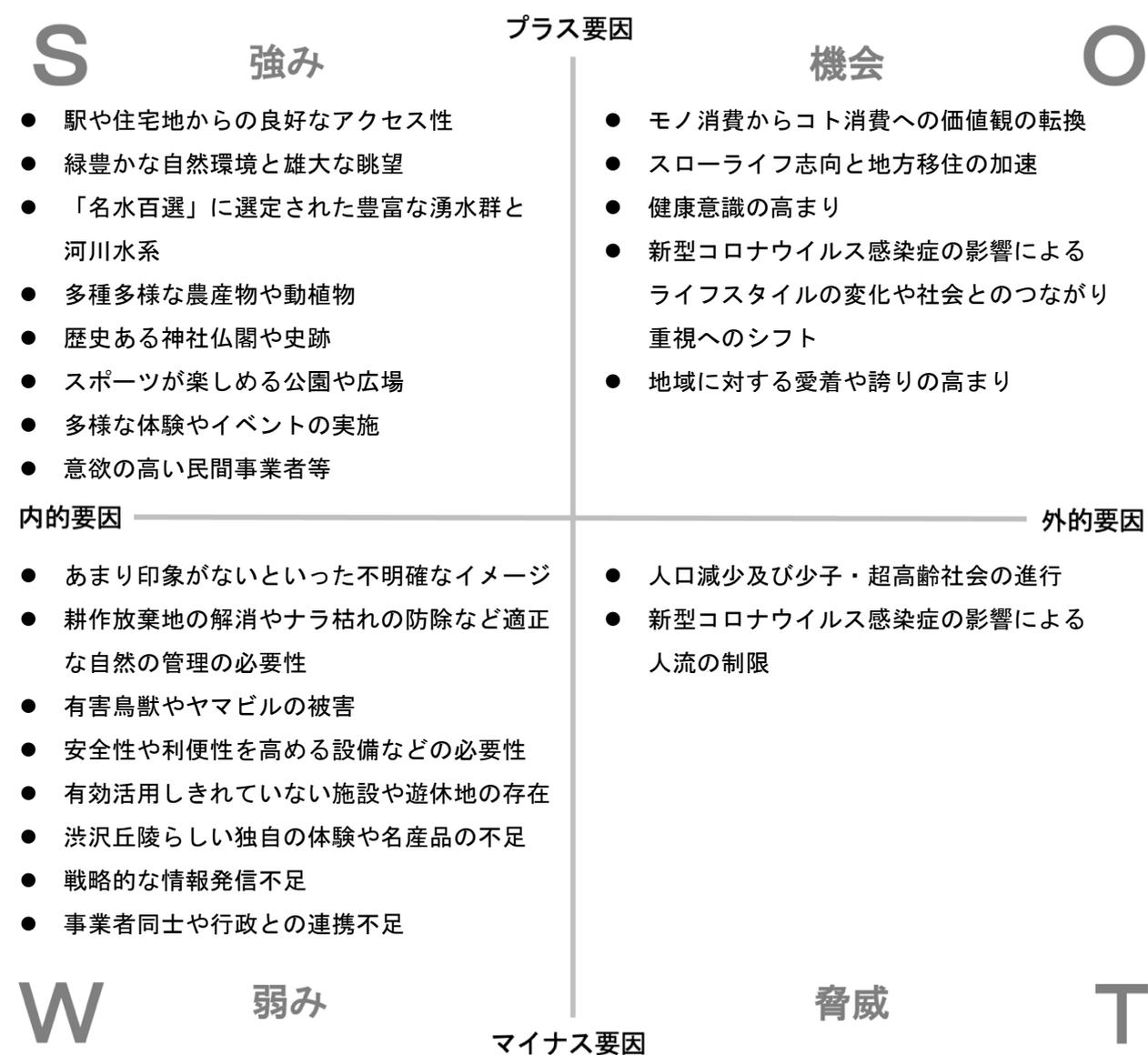
※7 峠漬：峠地区で収穫した大根、人参、胡瓜、茄子、三つ葉の5品を塩で漬け込み、酒粕で1～2年漬け替えながら熟成させたもの。

第3章 渋沢丘陵利活用方針

1 渋沢丘陵のポテンシャル

第2章で示した「関連する社会潮流」「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識や行動の変化」「主な地域資源」「秦野市Webアンケート調査」「様々な分野の事業者等に対するヒアリング調査」を踏まえ、渋沢丘陵が持っているポテンシャルについて強み（Strength）、弱み（Weakness）、機会（Opportunity）、脅威（Threat）の分析軸によって整理します。

(1) 渋沢丘陵のSWOT分析※8



※8 SWOT分析：現状分析のために使われる手法の一つ。内部要因（強み・弱み）と外部要因（機会・脅威）を掛け合わせて分析することで方向性や改善策を洗い出し、新たな戦略を導き出すもの。

(2) 渋沢丘陵のポテンシャルのまとめ

S（強み）× O（機会）の掛け合わせから

アクセスの良さを生かしながら、緑豊かな自然環境などの様々な分野の地域資源を市民や市外からの来訪者などの多様なニーズに応えられるように様々な視点から磨き上げ、気軽に訪れる機会を増やすことで、健康的で豊かな暮らしにもつながる人それぞれの楽しさや心地良さを発見できる場とすることができます。

S（強み）× O（機会）× W（弱み）の掛け合わせから

アクセスの良さや様々な分野の地域資源を生かしながら、渋沢丘陵らしさを感じられる時間や体験などを創出するために、豊かな自然環境の保全や設備などの整備、意欲の高い事業者間の連携、戦略的な情報発信などに取り組むことで、渋沢丘陵のイメージを明確化するとともに、市民や市外からの来訪者の継続的な来訪を促進し、渋沢丘陵とその周辺の活性化につなげることができます。

S（強み）× O（機会）× T（脅威）の掛け合わせから

意欲の高い民間事業者など地域の人材を生かし、市民と市外からの来訪者の交流を図りながら、渋沢丘陵らしさを印象づけることによって、渋沢丘陵を目的地にした人々が集まり、秦野駅・渋沢駅を中心とした市街地にもぎわうほか、市民は地域への愛着や誇りが高まるとともに、市外からの来訪者は渋沢丘陵を通じた本市への親しみなどの醸成につながることが期待できます。

2 渋沢丘陵利活用方針のコンセプト

渋沢丘陵の最大の魅力は、新東名高速道路の全線開通による首都圏や中部・関西方面からのアクセス性の更なる向上に加え、豊かな自然環境と様々な地域資源が秦野駅や渋沢駅周辺をはじめとした市街地からほど近い距離にあるという意外性にあります。それは表丹沢などの大自然に対して、渋沢丘陵は身近にある心地よい人と自然が共生している「中自然^{※9}」になると考えられます。

また、市民・地域活動団体や幼稚園、小・中・高等学校、大学等の教育機関、様々な民間事業者、県・周辺市町等の行政などがそれぞれの役割を理解しながら、連携を図ります。

そして、ごく身近にある澄んだ空気や美しい木々、草花、水辺といった気持ちを穏やかにする豊かな自然のほか、利便性と快適性を兼ね備えた閑静な住宅街、富士山や丹沢の雄大な山々を一望できる眺望など、多様な魅力を持つ地域資源を守り、磨き上げることで、渋沢丘陵を子どもから高齢者まで幅広い世代がより楽しみ、憩い、訪れる場所とするため、利活用方針のコンセプトを掲げます。

渋沢丘陵利活用方針のコンセプト

豊かなみどりに包まれ、人と自然が調和した

ウェルネスな日常の創造

コンセプト設定の背景

ここでの「ウェルネス^{※10}」とは、
ただ健康であることにとどまらず、
ここに住む人、ここで働く人、そしてここを訪れる人たちが
健康を基盤として、
豊かな人生や輝く人生を実現すること、
心身ともに生き生きと健康的で輝いていることを意味しています。
それは、手間と時間をかけて日常生活に向き合うことで見つけ出す、
自分らしい楽しさや心地よさのある暮らしを実現することでもあります。
渋沢丘陵の最大の魅力であるごく身近にある心地よい「中自然」は、
ウェルネスな日常を創造するのに最適な環境といえます。

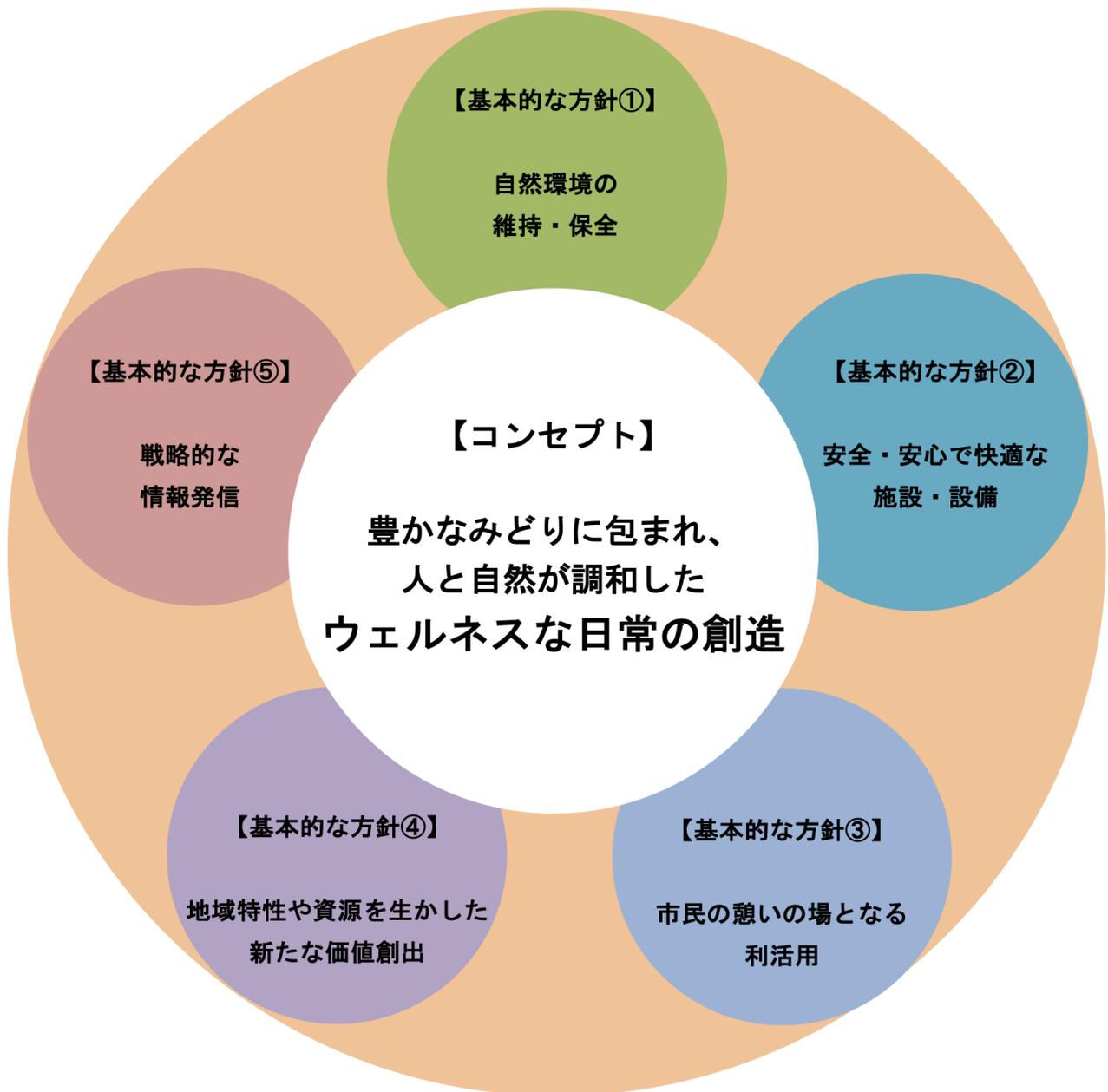
※9 中自然：人間の力の及ばない風土や生き物を示す「大自然」という言葉に対し、花壇など人工的な手入れをしないと維持できない公園、管理が必要な生き物を「小自然」とし、その中間で人間と生き物がバランスを保っている状態。

※10 ウェルネス (Wellness)：世界保健機関 (WHO) が国際的に提示した、「健康」の定義をより踏み込んで、広範囲な視点から見た健康観を意味する、より良く生きようとする生活態度のこと。輝くように生き生きしている状態。

3 渋沢丘陵利活用方針

渋沢丘陵利活用方針は、コンセプトである「豊かなみどりに包まれ、人と自然が調和したウェルネスな日常の創造」を実現するため、「5つの基本的な方針」を定め、この方針のもと、各取組みを展開していきます。

(1) 渋沢丘陵利活用方針の構成



(2) 5つの基本的な方針

コンセプトを実現するための基本的な方針を5つのテーマに分類し、各取組みの概要を示します。

コンセプト…豊かなみどりに包まれ、人と自然が調和したウェルネスな日常の創造

基本的な方針① 自然環境の維持・保全

渋沢丘陵には、長い歴史の中で人と自然が共生することで形成された緑豊かな自然環境があり、今なお様々な動植物が生息・生育しています。この次世代に残していくべき豊かな自然環境を生物多様性にも配慮しつつ、適切に維持・保全することにより、豊かで快適な環境を創出します。



生物多様性にも配慮しながら、豊かな自然環境を適切に維持・保全するために、継続的な森林里山の整備などに取り組みます。

基本的な方針② 安全・安心で快適な施設・設備

渋沢丘陵を訪れる子どもから高齢者までの幅広い世代の方々が安全・安心で快適に過ごせるように施設や設備などを整えていくことも必要です。ハイキングコースや道標、案内看板、トイレ、休憩場所、駐車場などの整備に加え、多様なニーズにも対応するため、活用しきれていない施設や耕作放棄地などの有効活用に取り組みます。



幅広い世代の方々が安全・安心で快適に過ごせるように案内看板やトイレ、休憩場所、駐車場等の整備に取り組みます。

基本的な方針③ 市民の憩いの場となる利活用

渋沢丘陵は、秦野駅や渋沢駅周辺をはじめとした市街地から近い距離にあり、市民の憩いの場として気軽に訪れることができる環境にあります。ウォーキングや森林セラピー体験など日常的に市民の健康づくりや癒し、交流に役立つような場づくりに取り組みます。



森林セラピー体験などを通じて日常的に市民の健康づくりや癒し、交流につながる場づくりに取り組みます。

基本的な方針④ 地域特性や資源を生かした新たな価値創出

渋沢丘陵は、秦野駅や渋沢駅、秦野中井インターチェンジから近く、都心からのアクセス性に優れています。地域にある次世代に受け継ぐべき歴史や文化、伝統、技術の掘り起こしのほか、渋沢丘陵でなければ体験できないコンテンツの開発などによって、市外からの来訪者のニーズにも応えられる価値を創出します。



収穫体験や産品直売などを生かしながら、渋沢丘陵でなければ体験できないコンテンツの開発に取り組みます。

基本的な方針⑤ 戦略的な情報発信

渋沢丘陵の多彩な魅力とコンセプトを市内外に広く発信するため、各種メディアへ渋沢丘陵の情報を積極的に提供するとともに、地域情報紙やフリーペーパーなどと連携するほか、ウェブサイトやSNSを活用するなど、戦略的かつ包括的な情報発信に取り組みます。



多様なメディアを活用して戦略的かつ包括的な情報発信を行います。

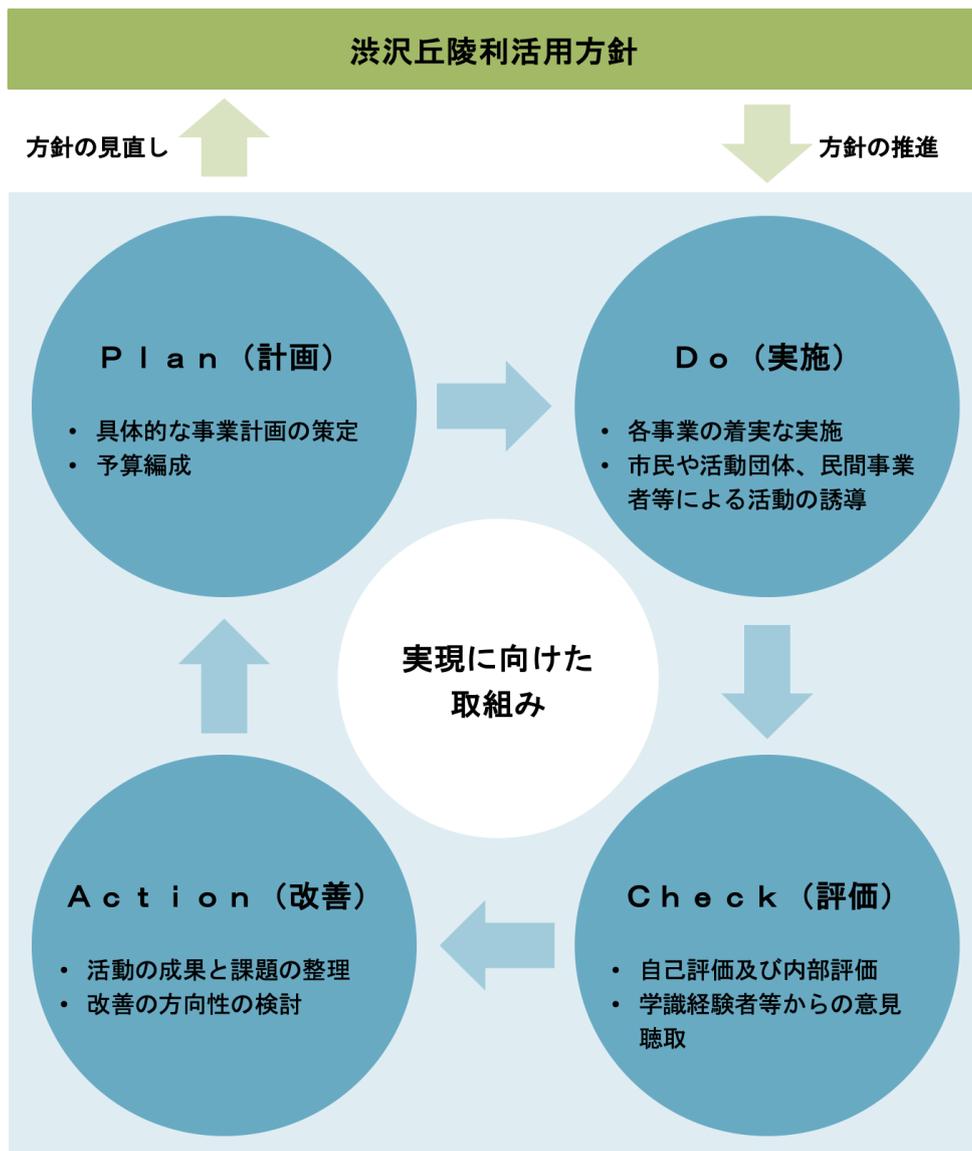
4 PDCAサイクルによる推進プロセス

コンセプトの実現に向け、具体的な事業計画の策定や見直しを行いながら、5つの基本的な方針に沿って進めていきます。

また、年度ごとに各事業の振り返りを行うことで、活動の成果と課題を明確にするとともに、達成できなかった取組みについては、その原因や問題点を分析し、その後の事業計画に反映していきます。

さらに、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、新しい生活様式への移行をはじめとした新たな価値観へのシフトやライフスタイルの変化が起きています。本方針についても各事業の成果や進捗を踏まえるとともに、様々な社会変化などに対して柔軟かつ的確に対応していくため、必要に応じて見直しを図ります。

具体的には、各部局による事業の自己評価やそれを総括する内部評価（庁内ヒアリング）のほか、状況に応じて学識経験者等の第三者からの意見聴取などを実施しながら、次年度以降の取組みに反映させていきます。



渋沢丘陵利活用方針

～小田急線4駅周辺のにぎわい創造に向けて～

豊かなみどりに包まれ、人と自然が調和した
ウェルネスな日常の創造

令和4年(2022年)3月 発行

編集・発行 秦野市環境産業部はだの魅力づくり推進課
住 所 神奈川県秦野市桜町一丁目3番2号
T E L 0463-82-5111(代表)
F A X 0463-82-6793
E-mail miryoku@city.hadano.kanagawa.jp
W E B <https://city.hadano.kanagawa.jp>

渋沢丘陵利活用方針



※本冊子の作成には、神奈川県の競馬事業収益配分金を活用しています。

